



子供讃歌 (一五)

倉橋惣三

一四 お召しをうけて

1 赤坂離宮

侍従さんと並んでお待ちうけしていると、トゆうたんで敷きつめた階段を、おそろいで登つて來られた。新しいカラーに新しいネクタイを堅く結んで、謹ましく立つている彼の前に、あまりにも間近く御會釋を賜つたお若いお姿に彼はまづ氣をやらげられた。兒童心理の連續講義に、赤坂離宮の攝政御殿に召された第一日の朝である。それから、お後に従つて講義の間に進んだが、お着席のとき、靜かにお話あいになつたお笑い聲のなごやかさに、彼の緊張はいよくゆるめられて、乳幼兒精神發達の第一講に入つた。彼はなるべくらくに興味多くお話を進めることを心がけ、引用の具體例も、市井の家庭生活からとることを考えていた。彼が謹嚴を心がけても、たかが知れたものであるし、高貴の生活にあわせての例などは、素より持ちあわせている筈がない。身分相應な卒直さが一番禮にかなうだろうと思つていた。それで、子供の精神發達の原理としての自己實驗(ゼルプスト エキスベリメンチールング)の實例にも、破れ障子を指で突いて孔をあけるところなんかを、ゼスチユアトで描いた。破れ障子はまだいゝとして、そゝけだつた古壘の上を匍いまわりながら、破れた壘のへりを指でつまんでみたがる光景は、下世話過ぎて御諒解にむづかしかつたかも知れないが、おかしそうにお笑いになつたりした。彼の口は、だん／＼と軽くなつていつた。

皇女の御生誕と共に、「親としての御勉強」という思召しは、彼の心を、光榮感よりも歡喜感で充たしたのであつた。彼の兒童心理學も家庭教育學も、つまりは、人間の子が人間の親の愛に育つ話である。人間性を外にして、彼の學說(?)に生命はない。その人間性が、どこまで、いつもの通りに説き出せるものかということが、實は聊かの懸

念であつた。ところが、この懸念は全く無用であつた。

いつも控えの間でいつしよになつた清水澄博士の御進講は、憲法（もとより舊憲法）についてであつたが、それが、どれだけ人間的のものであつたかは知らないとして、彼の課題は元來人間性そのものゝ研究であるといつていゝ。彼が例として引く親は、必ずしも八さん熊さんではないが、世間ありふれた、あたりまえの親であり、そこに出てくる子供は必ずしも鼻垂れやんちゃではないが、町や村にありふれた子供だつた。彼のよく知つてゐるのは、そういう親と子とだけだつたし、人間性の例として、彼等は決して卑しい例でもなく憚るべき例でもないといふ、彼は信じていた。——それにしても、こういうことを申上げ得られるのも、子供を語るものゝ幸福である。（昭和三年）

2 御 内 儀

幾年の後、御内儀のお講義室に召されるようになった時は、離宮の時よりも嚴かなるべきことであつたが、その前に一週と二週短い御進講を度び重ねた後でもありなごやかに數年つゞきの「兒童教育問題」を御進講申上げ得られた。

お内儀らしく美しいお床の間には、週毎に床軸がかけかえられ、美事なお花が活けかえられてあつた。殊に床脇の違ひ棚には、何びとの献上品でもあろうか、紋服袴の福助と打かけ姿のお多福との人形が、ふく／＼しくもにこやかな笑顔をして二つの硝子箱の中でならんでいた。或はふさげやの彼のためへのお心入れもあつたらうか。彼も一度となく二度となく、お話の中へ福助夫婦（？）を引あいに出した。其長いお講義の終りに近く、思いがけず特にお使いを以てこの好友を御下賜いたゞき、彼の家の家寶になつてゐる。

彼は、兒童教育の問題を、前講を承けて、家庭、學校、社會に亘らせ、時にはいろ／＼の幼兒の作品を大テーブルに陳べ、時にはさまざまの兒童生活の寫眞を衝立にはり、彼の言葉よりも、子供ら自身をして、問題の在りかと解説を語らせていくように仕組んだりした。その寫眞の子供らの中には、紙芝居を追う町の子らもあり、草野の日なたを馳けまわる田舎の子らもあり、労働兒童もあり、異常兒童もあり、感化院の少年らもあつた。つまり、彼が日頃愛しもし憂えもしている日本の子供の生活の諸相を、ありのままに描きだしたといつていゝ。そして、それらの子供は、問題として種々異つた面を提供するとしても、子供としての貴さと、日本の子供としての大切さにおいて、いづれも差がないというのが、彼の長い講述を一貫するものであつた。これは、いつも彼の心にあることである。しかも、

こういう言葉を用いて差支えないものならば、此時彼自身の平常よりも、廣く高いところに目を置いて、日本の子供の問題を考へる機會を興えられたといつて、但、とはいふものゝ、甚だ知らざる盡さざるを常に思つたのであるが、それを、お卓子の上でノートせられる御熱心を拜しては、たとえば濫い潮の海に満ちてくるような思ひを、小さい胸に禁じ得なかつたのである。

これはもう、『親としての御勉強』に止まるものではない。又、たゞ一般の御教養に止まるものでもない。日本の子供の福祉と教育への御關心と御慈心のお時間である。そして、それが彼の生涯『子供讃歌』の中の、最も意を籠めた貴重な章節であつたことは、いうまでもない。こちたき論議は知らないが、こうして、純一な兒童愛が中心になつてゐる場に、湧くものも、溢れるものも、流れるものも、うるおい漲るものも、豊かなる人間性である。人間性の話は人間性によつてのみ理解せられる。彼は、いつも此の人間の喜びをもつて参内した。また此の人間の満足をもつて退下した。子供の無邪氣とあどけなさが、最も人間の眞實を以て受けとられると信ずる喜びをもつて、又、子供を愛する精神とはたらきが、最も人間的に共感せられると信ずる満足をもつて。——更に卒直な言葉がゆるされるならば、人間としての子供について、最もよき聴取者の前に出るといふ實感を以て、毎週が彼を幸福にした。『人間』。萬古變りなき言葉であり事實ある。(昭和九、十、十一、十二年)

3 東宮假御所

前の年の秋から、學習院幼稚園の先生と幼児とをお召しになつて、赤坂の東宮假御所の御苑内の建物に、幼稚園を開かれた。その假御所へ、一週一二度であるが、お相手に上ることが、どんなに楽しいことであつたらう。幼稚園の幼児らが上らない日には、お付きの人々といつしよにお庭で御いつしよに遊ぶ。仰せつかつてゐる任務を心得つゝもつゝ自分で興じて仕舞う彼であつた。

困つたことに、遊び方の不得手な彼は、何をしてもまづい。お池の釣には、餌ばつかりとられる。まり投げではミスばかりつゞける。自轉車に乗れないので三輪車を貸していたゞいて、よち／＼とやるが、それでも急ぐと運轉しそこなうのだから、我れながら手がつけれない。お採りになる草の名は知らないし、いろ／＼の虫を平氣でおつかまへになつてお渡しになるのには、有り難く手をひつこめる。こんな不手際なお相手ではあるけれども、長年の保育者

としての彼の経験から、優れた御生來の數々を見落しはしなかつた。その上、傳育官諸君の正しい御指導を得てられるので、何を補うということもなかつた。こうして、だん／＼お親しみをいたゞいたが、彼としては、一切御機嫌をとるということをしないうちに、堅く自分に言いつけた。保育法の原則として、お茶の水の幼稚園児たちに對しては、同じである。

假御所の四季は美しい。廣い御苑内に丘があり、流れがあり、森がある。御いつしよにエキスカーションをするだけでも、相當の運動である。待醫寮の積極的保健の方針もあつて、室外の御生活が多いが、普通の幼稚園でいえば、毎日一とかどの園外保育である。従つて、自然保育、自由保育の時間は、彼の懸念に反して、お茶の水の幼稚園よりも充分といつて、位であつた。自然と自由とは、もとより保育のすべてではないが、性格に、のびやかさとゆるやかさとを培う。のびやかさは己を直くする必須條件であり、ゆるやかさは他をゆるす寛い心の基である。己を直くすることゝ、他をゆるす心とは、敬愛を受くるの眞價である。こちらへ上る前に、なんとなく考えていた懸念を、彼は全く忘れた。

夏、御避暑の葉山御用邸へ伺つた時のことである。渚づたいに、貝がらや、海藻の採集をしているうちに、水たまりに打ちあげられている小さい子だこがお目にとまつた。すぐおつかまへになつて、おもちゃのバケツに入れられたが、それを大事に持つことを彼に命ぜられた。彼は、それを逃がしてはならぬと、大事に提げて歩いたが、水が少ししか入っていないのに氣がついて、海水を汲み入れてやるうと思つた。そこで岩のさきに出て、バケツを海につけて静に水をふやそうとした。そのとき波が來た。驚いてバケツを上げたが、その瞬間、ひく波と共に子だこが逃げたら大變である。貴重品の保管物である。彼はどきつとした。顔色も變つたかも知れない。おそる／＼バケツを、のぞいてると貴重品が見えないではないか。彼の顔色はいよ／＼變つたに相違ない。あの子だこはと仰せられたら何んと、しようか。大失態である。すると、よくみると、居た居た。波といつしよに入つた砂の下に、小さいながらこの形のまるい小さい頭を埋めて居た。彼はほつとした。そうして、後でそのことを申上げたら、お笑ひになつたゞけだしもお附きの人に話したら、『そんな心配はいりませんよ。何事もお咎めになるといふことはありませんから』というのが答であつた。こんなことは、まゝあつたが、あの子だこ、その時の貴い喜びとは長く忘れない。(昭和十三年)

まだ御いとけなかつた弟宮のお相手には、青山御殿のお庭では、お附きの女官や若いお附らとお遊戯をして踊つたり、興津の御用邸の涼しいお二階ではおとき話を申上げたり、紙芝居を演じてお見せしたりした。そのお附きの中には、女高師の保育實習科出から御推舉したのも居たので、『先生』（彼のこと）の演藝のまづさが、おかしきといつては聲を立て、笑つたりした。それをまた、傳育官の諸君が面白がつて笑つたりした。彼は、わざとおかしきするのではないが、自然とそうなるのだから仕方がない。彼女たちは、ふだん理論を説く『先生』の真相（？）を發見して喜んだのかも知れないが、まづいのは何んとしても相濟まないことだ。それでも彼はせう、一ぱいであつたのである。那須の御用邸での御散歩の時である。山を少し奥にはいつた處に、細い丸木橋があつた。彼は、ものを渡るといふことに噎病で、兵營時代、梁木を渡らせられるのにいつも足がふるえた方である。（見せかけは、りきんでいたけれども）その橋は勿論、そんな高いものではないが、下には低い溪流がある。彼が、どうしたものかと、一寸たじろんでみると、お附きの人が先頭を申し上げる後から、どん／＼お渡りになる。多分、幾度びかお渡りになつて、決して危険でないことが、皆に證明されていたことに相違ないが（素よりのことである）彼は、向う岸へお渡りきりになつた後で、ふとつた短い足をしづ／＼とこそは橋の上ののせた。

勇氣の鍛錬ということは、彼の常に論ずることであるが、その實行は必ずしも容易でない。特に、そのむづかしさが最も多いと思われるのに、この實際を見て、この御保育に大に敬意を感じたのであつた。このたぐいの場面も幾度かあつたが、あの溪流の丸木橋は、今もあり／＼と思ひだされる。（昭和十四、五年）

『召されてと題して、こういう專柄を筆にすることを、彼は、幾度びか差控えた。しかし、彼の『子供讚歌』を飾るものとしてよりも、『子供讚歌』のあらゆる場合の眞實を唱詠する心で、此の筆をとつた。召されたのだから、何かの御用もあつたのであろうが、それを果したというよりは、大きな『子供讚歌』の一節を、こゝでも歌わせていたゞた感激の日の記録として。

『子供』。あらゆる場で、その貴さが高唱る言葉でもある。

いつも頂戴して歸るお菓子、必ず父と母との寫眞に供えた。彼がこうしてお召をうけていることを、最も喜んでくれると思う父と母との平生の心を思い浮べては。